

マラウイ便り -Vol.3-

ムリバンジー！！（こんにちは！）

2018年2月現在、マラウイは雨期が終わりに向かっておりますが、暑い日々が続きます。日本は例年以上に寒い日が多いようですね。

早いものでマラウイに来て1年が経ちました。ここでの生活が当たり前になってきたこともあれば、まだまだ新しい発見もあります。今回もマラウイならではの出来事を紹介しますので、少しでも楽しいアフリカ生活を感じていただけると幸いです。

マラウイでジャパンフェスティバル開催！

「1月にここのグラウンドで何かやってくれない？」

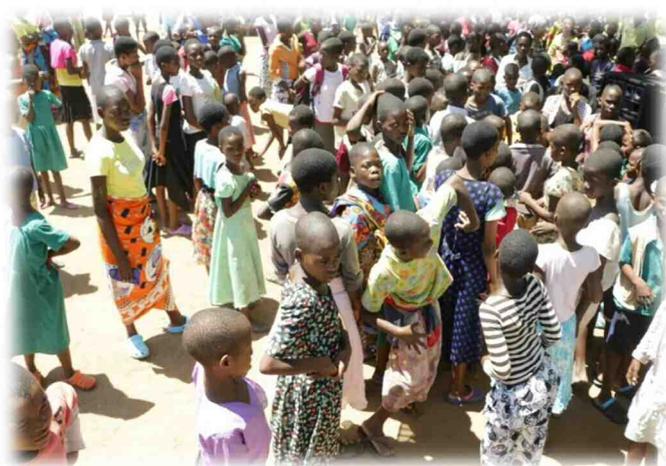
マラウイに来て1年、マラウイが今後発展していくには、「初等教育」が何より大切だと感じています。教育者ではない自分が初等教育段階の子どもたちにできることは何だろうと考えていた矢先、同僚から冒頭の一言。そこで、日本の文化を通して、子どもたちの視野を広げるきっかけづくりをしたいと思い、日本文化をテーマとしたお祭り「ジャパンフェスティバル」をやりたいと伝えました。するとお祭り好きのマラウイ人の間で、「日本人が日本のお祭りをやろうとしている。」と話はどんどん広がっていき、なんと私の任地の県知事まで話が届きました。しかも、イベントの趣旨に共感してくださり、会場費、機材レンタル、人件費、物品経費やゲストの宿泊費など、すべての資金を県予算でまかなうというお言葉をいただきました。県がそこまで協力してくれるならと、同任地の学校隊員と共に張り切って企画しました。日本の縁日のようなイメージで、輪投げや豆つかみ、凧揚げ、おにぎりコーナーなどのブースを設置して、来場者に自由に回ってもらえるようなスタイルにしました。企画書や予算案を県に提出し、承認をいただき、必要な機材や物品の準備を

順調に進めていた最中、県知事から「今月分の県予算を使い切っちゃったから、やっぱりお金は1クワチャ(1銭)も出せない。」と開催2週間を切ったところでまさかのお達しが。お金を出せない代わりにと、県知事がくれたのは1枚の紙。これは、県内で募金活動をしていいよという許可証で、お金が必要なら、あとは自分たちで集めてきてくださいとのこと。それまで順調に行き過ぎていた分、これでこそマラウイと言い聞かせ、それから2週間、個人宅、レストラン、ホテルと、所かまわずい



隊員が描いてくれた垂れ幕！

ろんな人に声をかけ続けました。いつも外国から支援を受ける側のマラウイ。いつもあれちょうだい、これちょうだいのマラウイ人。きっと誰も恵んでくれないだろうと疑いながら始めた募金活動でしたが、丁寧にイベントの趣旨と内容を説明すると、たくさんの方が共感してくれて最終的には100人以上の方が募金してくれました。ある人がない人に分け与えるのが当たり前のマラウイは、外国から支援をもらうことに対して貰って当然と思っている人が多いと思っていたのですが、今回自分が貰う側になり、彼らは決して貰うのが当然と思っているのではなく、困っている人に分け与えるのは当然という精神で、外国人であっても困っているなら当然助けるという優しさに触れると同時に、自分の考えを改めるきっかけとなりました。おかげで何とか費用も集まり迎えた当日。スピーチをお願いした主賓が来なかったり、開始時間になっても半分以上のスタッフが来てなかったり、業者がテントの回収に来なかったりと、1歩進んでは1歩下がるような具合で、なかなか物事は進まなかったけど、その分、子どもたちのためにとボランティアで協力してくれた地元の方々の優しさが染みしました。そして何より、当日は25人の協力隊員がマラウイ全土から来てくれて、それぞれのブースをしっかりと運営してくれてとても助かりました。1000人以上が来場してくれた今回のジャパンフェスティバル。最後はみんなで盆踊り。フェスが終わった翌日から、私の家まで出向いて東京音頭を披露してくれる子ども達が後を絶たないことが、今回のイベントの成功を物語っていると思いたいです。



まずは整列から教えます。これでもちゃんと並んでる。



女の子は浴衣に興味津々！



豆つかみ！初めてのお箸、上手！

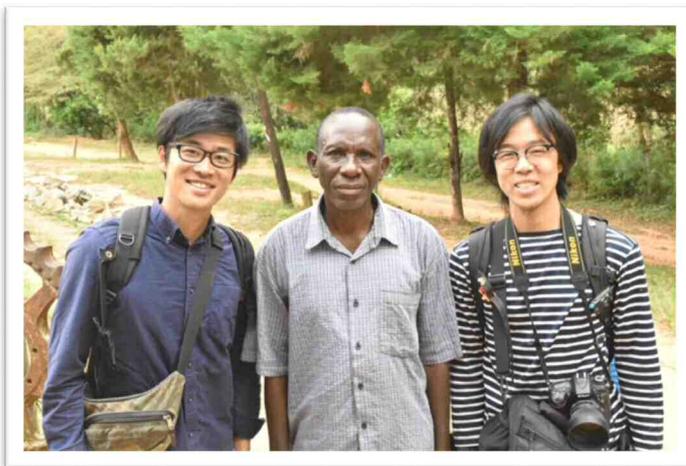


大盛況の漢字ボディペイントブース

マラウイで母を訪ねて

突然ですが、ここで私の家族について簡単にご紹介します。

私の両親は、実は母父ともに青年海外協力隊の経験者です。父親は元エチオピア隊員、母親はマラウイ隊員の大先輩にあたります。両親ともに協力隊経験者と言うと、なるべくして協力隊に参加したと言われることもありますが、決してそんなことはありません。家庭で両親から協力隊時代の話聞くことなどほとんどありませんでしたし、マラウイという国についても恥ずかしながら最近まで知りませんでした。たまたま、母親と同じマラウイに派遣が決まったのです。さらに偶然は続き、1歳上の兄が、同時期に協力隊に応募していました。協力隊に合格すると、任国へ派遣される前に研修を受けることになるのですが、研修会場で兄に出くわしたときは、兄のそっくりさんがいると思っていました。2人とも協力隊への参加が決まり、私はマラウイ、兄は同じアフリカのウガンダへ派遣されました。協力隊には、年間20日であれば私的に特定の外国へ行ける制度があります。先日、兄がマラウイへやってきました。せっかくなので、元マラウイ隊員の母が当時住んでいた任地を二人で訪れることにしました。訪問にあたって目標は3つ。母親が働いていた学校を探し出すこと、母親の知り合いを見つけること、母親が住んでいた家を探し出すこと。手掛かりは母親の働いていた学校名だけ。学校の住所も連絡先もわからなかったのでアポなし訪問。私の任地マチンガから片道10時間、ひとつでも目標をクリアできればと思って行ってきました。目的の町に着き、まず初めに学校を探そうと思いだ端の人に学校への行き方を聞くと、すぐに案内してくれてあっという間に学校へ到着。学校は夏休み中でしたが、事務の方に母親が30年以上前にここで働いていたことを伝えると快く校内を案内してくれました。一通り校舎を見て回った後、母親の知り合いを探そうと思い、近くを歩いていた年配の男性に「30年前にここで教師をしていた日本人を知っていますか？」と聞くと、すぐに母親の名前が返ってきました。なんとこの方、30年前に母が住んでいた家のお隣に住んでいた方。何たる偶然。お名前はフランシスさん。ついでに当時の母の家まで案内してくれました。現在は教員住宅として先生が住んでいましたが、手前の事情を説明すると快く家の中を見せてくれました。家の前で写真を撮ってすぐに母に送ると、「あら、私が住んどった家やねえ。懐かしい。」と意外にもあっさりしている母。学校探し開始からあっという間に3つの目標を達成。そこからフランシスさんが当時の思い出を嬉しそうに話してくださいました。学校の方々も村の方々も突然の訪問にも関わらず快く受け入れてくださり、訪問を心から喜んでくれました。30年前、母が築いた



左から、私、フランシスさん、兄。

関係が今もこうしてこの場所に残っていることは誇らしく、自分自身にとってもマラウイで出会う人々との繋がりはこの2年間だけで終わらず、30年後に覚えていてもらえるような関係を作っていきたいと思えた母親ルーツ探しの旅でした。

マラウイで吸血鬼騒動！？

「吸血鬼がでるから、夜はしっかりと戸締りしなさいよ。」

昨年9月頃、近所のおばちゃんに唐突に言われた言葉。脈略のないこのセリフに困惑しながら、この時期になるとコウモリでも増えるのかと考えていました。翌日、いつものように職場に行き、午後から予定していた村の訪問準備をしていると「今日はその村に行かない方がいい。吸血鬼と疑われて石投げられるかも。」と同僚からの助言。いまいち事態が呑み込めないまま、その日は村に行くのをやめて周囲の人に話題の吸血鬼について聞き込みを行いました。噂によると、どうやら吸血鬼が隣国のモザンビークから国境を越えてマラウイ南部のムランジェ県へやってきているとのこと。単なる噂で盛り上がっているのだろうと初めは鼻で笑っていましたが、徐々に事態は重くなり、結果的に大変な騒動へと発展してしまいました。

「情報」へのアクセス方法が多様化している現代で、マラウイの地方に住む人々の主な情報源は口コミ。伝言ゲーム式に、人から人へありもしない噂が広まり、その噂を信じた村人たちが、自分たちの手で吸血鬼から村を守るために自警団を組織しました。そして、この自警団が吸血鬼と疑わしき人を次々に襲う事態へ。これによって死傷者は10名を超え、逮捕者は200人超。事の鎮静化を図るため、大統領がマラウイ南部を訪れ、吸血鬼の存在を否定して回るという事態。雨季に入り、農作業が忙しくなったことで最近はやや騒動が落ち着いてきたとはいえ、協力隊の仲間も噂の発生源であるムランジェ県周辺に住んでいた隊員は首都避難、任地変更を余儀なくされました。悲しいことに、日本のニュースでもマラウイの生活水準や教育水準の低さから、今回のような騒動が引き起こされたと書かれていました。確かに、起こってしまった事は事実だし、あつてはならないことだけれど、決してマラウイ人みんながこれを信じているわけではありません。ごく一部の行き過ぎた若者たちが根も葉もない噂を信じ、罪のない人を襲ったのです。ひとくくりにマラウイ人の性格がどうだ、国民性がどうだ、教育がどうだと言える問題ではないと思うのですが、外国から見ると、ひとつの事件がその国のイメージを決めてしまうことはあります。国の信頼のためにも、マラウイで暮らす人々のためにも、一日でも早く事態が完全収束することを願います。

なんだか変わり種ばかりになってしまった今回のマラウイ便りですが、少しでもマラウイの生活が伝わっていれば嬉しいです。次回はもう少し、コミュニティ開発隊員としてメインで行っている活動について紹介しようと思います。それでは、ティオナナ〜（さようなら）！